

東亞醫學

宇田次郎長學也

第二十六號

投稿規定

讀者各位の投稿を歓迎す。
題目、内容は時事、學術、文藝其他隨意。
長さは一〇〇〇字以下とす。

東亞醫學の廢刊に際して……木村 長久

- 東亞醫學誌の終刊に題す……矢數 道明
- 漢方鍼灸と高等數學……山元 吾策
- 田舎便り……瀧田 行彦
- 北京通信……尾部 瀨順久
- 拓大漢方圖書館開館式
- 存劑醫盧治驗記……葉 橘 泉
- 漢醫診斷與調劑法……錢 問 停
- 發展的解消へ……矢數 有道
- 溫知社遺品協會へ……編 集 部

東亞醫學の廢刊に際して

木村 長久

我等は時に觸れ折に觸れて何を爲すべきか如何にあるべきかを反省しなければならぬ。東亞醫學の廢刊に際しても亦た此感を深くする。大學に謂ふ所の格物致知は學に志す者の終生努力すべき條目である格物致知は何の爲か、己の身を修むる爲であり、仁を行はんが爲である。我等は醫に志し、醫を行ひつゝある。醫を行ふの道として漢方醫學に據つた。漢方醫學の味はたゞ之を食ふた者のみを知る。我之を美味なりとせば、之を人に奨めんとするは亦た人情である。同好相集りて之を味ふときは又益々その美味を覺える。此に於てか會合が催され、機關誌が發行されるのである。會合が成立し、機關誌が發行されるのは同志の士を集むる所以であり、切磋琢磨の爲である。然らば會が益々盛大となり、機關誌が益々其使命を果すにはどうすればよいか。それは會員各自が格物致知に勉強努力すればよいのである。

東亞醫學協會の機關誌「東亞醫學」は興るべくして興り、廢すべくして廢することとなつた。興廢俱に天なり命なりで今亦た何をか言はんやである。協會諸先生にして健在、且つ學術に勤勉たらば東亞醫學の廢刊は斯道に於て損ずる何物も無い。況んや「漢方と漢藥」誌が存續し、之に協力するとせば今まで分散せる力を專一にすることとなり、反つて斯道の爲る慶賀すべき結果を招來すること、信ずる。何れにせよ「本立つて道生ず」であり、「君子は本を務む」べきである。之を本誌廢刊に際しての言葉とする。

本年度拓大漢方講座教材及講師

漢方處方學講義

傷寒、金匱の要方解説(傳染病科) 後世要方の解説

大塚 敬節

漢方治療各論

産婦人科、小兒科、眼科、齒科、皮膚泌尿、耳鼻咽喉、花柳病科

矢數 有道

漢方醫學總論

病因學、證候學、診斷學、治療學 消化器病、呼吸器病、神經病、循環器病 物質代謝血液病科

同 野 一 雄

中國醫學史

中國醫學史、漢方處方學講義 運動器病、外科的疾患一般

同 龍 野 一 雄

漢方藥理學講義

藥効、用量、用法、方劑、應用 實物、基元、性状、鑑別、成分

同 清 水 藤 太 郎

漢方藥學講義

日本に於ける漢方醫學の變遷 十四經、奇經八脈、阿是、禁穴

同 木 村 長 久

日本醫學史講義

日本に於ける漢方醫學の變遷 十四經、奇經八脈、阿是、禁穴

同 柳 谷 素 靈

鍼灸治療學講義

應用治療學

同 柳 谷 素 靈

日本食養學講義

日本の食養學總論及各論 代表的疾患の治療法詳説

同 小 田 出 壽

鍼灸治療各論

日本の食養學總論及各論 代表的疾患の治療法詳説

同 代 田 文 誌

民間藥講義

日本の民間藥の一般

同 栗 原 廣 三

藥草栽培採取講義

栽培採取の指導

同 渡 邊 武

その他藥草園見學藥草採取ハイネキグ等あり。

その他藥草園見學藥草採取ハイネキグ等あり。

同 栗 原 廣 三

詳細は拓殖大學教務課へ問合せられ度し。

詳細は拓殖大學教務課へ問合せられ度し。

同 栗 原 廣 三

期間 自四月一日至七月三十一日 毎日午後六時より九時

東京市小石川區茗荷谷町三十二番地

拓殖大學

東亞醫學誌の終刊に題す

矢數道明

吹く風にいさぎよく散れ山櫻
残りの花は訪ふ人もなし

これは漢方凋落當時、さる一老漢醫の所懐であつた。自ら決せずんば自ら滅ぶ、時代の嵐の中におが東亞醫學は今潔く散らうとしてゐる。本誌を以て總計二十六號

咲き競つた花びらは、吹く春風に音もなく散るけれども、その花びらの跡には既に微かながらも、堅い實が結ばれてゐることを信ずる。

二月十二日、十年の傳統を誇る漢方と漢藥誌は、當局の命ずるところにより廢刊届を提出し、向ふ一ヶ月以内に他の醫學雜誌二つと合同するに非ざれば再び刊行を許さずといふ嚴命に接した。他のあらゆる一流雜誌も亦同様の命令を受けたこと勿論である。そして次に來るべきものは本誌東亞醫學に對する同様な時代の運命である。

大雜誌社の小誌買収戰の物凄さが展開され、匆忙の數日が過ぎた。「漢方と漢藥」「東亞醫學」醫道の「日本」それは大根幹の上に芽生えた兄弟樹であり、東洋醫學の振興といふ一大潮流に踰趨合同すべきそれ／＼の支流であつた。茲に於て靜かに勘考すれば數年の長たる漢方と漢藥誌にその名を嗣がしめ他の二誌は喜んで之に合流すべきことは極めて自然の勢である。そこには何等の無理がなく、經濟的計算や、個々の主義主張の條件が些かもない。幸なる哉三誌は道の爲めを思ふた、一筋の心から、それ／＼お互に感謝し合ひ乍ら合同が成立した。その夜の感激は永久

に續く東洋醫道の凱歌であつた。本誌は決して消滅するのではない、それは譬へば、病に死すべき身を、畏れ多くも 大君に捧げまつり、天皇陛下萬歳を叫んで英靈と化した皇軍將士のそれにも比すべき、魂の飛躍 生命價値の久遠昇化であるのである。

「主義精神を異にする者の集合には如何なる結束もなく、善意の合計は如何なる決意をも生まず」と敗北佛蘭西を背負ふて、ペダン元帥が長嘆したといふ。吾人は以上三誌が東洋醫道顯揚の土臺の上に心からなる結束と、強力なる實踐に一步を踏み出したことを喜ぶものである。

易經に「翰音天に登る、何ぞ長ふすべきや」とある。云ふ意の、翰音とは雞が羽ばたきをして、勇

ましく関を作る貌で、その聲は高く天に登るが、體は天に飛ぶこと能はず地上に留るもので、掛聲や主義主張のみ高く天に沖してその實の伴はざるを戒め、有名無實は永續性なきことを諭したものである。漢方醫學復興進展の翰音天に沖すること既に久しく、その實の伴はぬを憾みとし、吾等の深く反省すべきところである。

然し乍ら漢方醫學振興の曉を告ぐる翰音は未だ必ずしも明朗透徹な響に達してゐない。來るべき日本漢方醫學會の大飛躍とその活動に期待するものである。

又東亞醫學協會は依然として存續し、否益々その活動の必要に迫られて來てゐることは別報の如くである。漢方と漢藥誌上に東亞醫學欄が設けられて協會の情報はお傳へすることになつてゐる。本誌終刊に際しての私の感想は橋樑翳翁の
まことあれば土のそこにて鳴く
蟲のこゑも雲井にかようなりけり
の歌の心であつて、まことでも微力を盡し度き一念に燃ゆるのみである。
(皇紀二六〇一、三、六)

漢方鍼灸と高等數學

山元吾策

現在西洋醫學は確に進歩してゐるが皇漢醫學も大いに、進歩して來てゐる。而して殊に鍼灸學に於ては長足の進歩をなし、既に二十數名の博士が續出した。そうして一應、鍼灸の効果が科學的に立證されて來たし、殊に京大の石川日出鶴丸博士及び其の門下生によつてラングラーの遠心性自律神經二

重司配法則に暗示を得て、求心性自律神經二重司配法則が確立してヘッド氏帯と經絡經穴との關係を明らかにし、ヘッド氏帯成因の根本理由を明瞭にしたのであつた。併し尙、經穴の神秘性については不明な點が多いが、とに角、今後經絡の本態を研究する上に、一つの重要な因子となつた功績は讚美

春季漢方醫學大講演會

日本漢方醫學會 主催

「東亞醫學協會」「醫道の日本社」後援

日時 昭和十六年三月二十九日(土)午後一時より

會場 東京醫師會館 (神田淡路町)

演題

- 一、開會の辭 矢數道明氏
- 一、喘息に對する先哲諸家の説と自家經驗 三上平太氏
- 一、漢方入門 間中喜雄氏
- 一、「志都の石室」を讀む 大塚敬節氏
- 一、内經の研究に就て 矢數有道氏
- 一、鍼術の臨牀價値 井上惠理氏
- 一、本質的鍼灸術に就て 柳谷素靈氏
- 一、平野革谿の著書と學術 安西安周氏
- 一、漢藥の修治法論 清水藤太郎氏
- 一、新體制と民間藥 栗原廣三氏
- 一、私の考へる食養に就て 小出壽氏
- 一、閉會の辭

すべきである。併し漢方鍼灸を通じてその博士論文を眺める時、果して之れだけでよいと云へるだらうか？ 私は否と云ひたい。一般西洋醫學は勿論のこと、漢方鍼灸家が、身分向上の標準とせる齒科醫學をも検討するに、中等學校でなく學ばざる微積分などの高等數學を使つた學説が相當にある。殊に齒科に於ては、齒科材料學に於てカプセル鑄造の距離測定に微積分が使はれてゐる事に注目すべきである。併しこの學説が、臨床上必要か否かは別として、とに角齒科學にも高等數學の學説が存在するのである。

處が悲しい哉、鍼灸博士は二十人も出来たが、高等數學の學説がない。まことに残念である。そうして、その博士論文は醫學的な常識さへ具備してゐたら、その論文の内容は誰にでも、大凡そ推知出来る。ところが高等數學を使つた醫學の論文は、仲々おもしろくは理解が出来ない。尙哲學には、高等數學を使つた學説が有るか云へば、有る。最近死去した佛蘭西の哲學者ベルグソンの著書「時間と自由意志」の中にある。即ち彼は感覺について論じ、ウェーベルの法則を出発點としたフェヒネルの法則を例示してゐる。即ち $CS = C \cdot (BE)$ の微分方程式から $S = \int (BE) dx$ なる積分の方程式を掲げ感覺生起に關する既述の法則から感覺測定に關する未證の法則に移つてゐる所のフェヒネルの法則を引例し、精神物理学上のデルボエフの方法とフェヒネルの方法とを別々に吟味して、何れも不満足であると論じてゐる。斯く哲學にも微積分はその學的體系を深遠ならしめる上に、一つの大きな因子となつてゐるのである。殊に鍼灸の如きは、長年月の治病上の經驗からとは雖も、身體の上に何寸と

云ふ數が置かれ、骨度法、同身寸によつて距離を測定してゐる。深く考へれば、人體上に數を置くことは數の神秘性を物語つてあまりある。而もその數の羅列は、等差級數的でも等比級數的でもない。まことに現代の醫學程度ではない。この數の神秘の謎は解明し得ないであらう。慶大教授の林博士はロシアの生理學者イワン・ペトローフイチ・パヴロフの發見せる條件反射學の研究の第一人者であるが、林博士が中央公論社より出版した「生理學何故何故ならん」の著書中に相關性理論や、生理學認識論を論じ、且つ「物理學が發展するも數學によつて生理學が發展する」とは毛頭信じない。生理學には未だ發見されないが、独自の數學が發見せられるに違ひない。そして始めて絢爛たる歴史を描くだらうと信ずる。微積分の發見が、力学に對して與へた様な、マトリックス數學が量子論に對して與へた様な助けは、生理學に、他日、新しく發見される數學によつて與へられるだらう」と述べてゐる。

別派獨立の宗教となつたのである。處が將來漢方鍼灸醫制度の確立を論議される時に宗教の教理同様な漢方鍼灸の學説を政府が點検して「西洋醫學には、高等數學を使つた學説があるが、漢方鍼灸にも、そうした學説が有りや」と問はれた時「無い」では濟まされないと思ふ。是非とも此の際政策的にも又、漢方學說體系作成上にも學者は人體醫學の見地から刺戟生理學や刺戟病理學を開拓して微積分を基礎とした漢方鍼灸の新しい學説

を作らねばならぬ。而して各府縣の鍼灸開業試験にも、此の新學説をどしどし提出し見たら如何。恐らくは、受験者は無いやうになるかも知れない。然らば開業試験は中止して、高等漢方鍼灸醫專出身者へののみ漢方鍼灸醫たる資格を與へればよい。そうなるに、各府縣の盲學校の制度も改正する必要が大いに生ずる。之れに就いて幾多論じて見たが、今回は之れでペンを擱く。

私は何故かく云ふかと申せば、早い話が、宗教に於て、神道十三派中の二大宗派であり、獨立宗教として政府が認められた金光、天理宗教に例を取れば、政府が「然らば貴殿の宗教の教義を拜見したい」と云ふ「はい」と答へて差出した教理が、他の佛教やキリスト教より劣つたものならば、到底獨立宗教として政府が認可せぬだらう。併しうまく宗教の天才たる兩教の幹部が云ひ抜けたので、今日兩教とも

八日は針供養と云ひ、お寺の數と共に結城名物たる裁縫所の幾百と云ふ娘さん達が、針に祈りと感謝を捧げるお祭りをして一日遊びます。私も毎年この日は休業して針と艾の供養日として居ります。醫學學校でやる解剖した者の供養とも似て居ります。志ある漢方鍼灸の先生方もこの日は針なり草木なりの供養日とされるのも面白いと思ひます。

鍼灸師にして拓大漢方講座を修了せる場合、看板又は廣告等これを通り記載する事の可否につき左記の通り回答を得ましたので御報告申し上げます。

寒い冬の毎日を日光風にあはるべから自轉車で往診するのも樂ではありませぬでしたが、もうすつかり春めいて参りました。枯芝を焼いて眞黒くなつて居る野の跡から若草が萌え出でて、うららかな春日の日がやほかくそ、いで居ります。水府の梅も眞盛りです。たまにしら煙の出ない治療室のストーブもいらなくなりました。これからそろそろ蕪の時節です。舊の二月

てありました、一切縣の見解にまかせたものと思ひます。

一、當署の係は醫師類似になるから不可との事でした。併し醫師法と云ふ所のものは醫師又はこれに類する名稱を不可とするので、出身學校名は名稱に非ずとの私見の許に得心出來、更に厚生省と縣廳へ照會致しました。

聖戦下四度現地に迎へた紀元節北京同胞八萬人の胸に燃へる「臣道實踐」の赤誠は、聖業達成へのおほらかな誓ひを盛りあげて、零下十三度の大陸の酷寒をついて早朝東單練兵場に於ける北京居留民團主催、皇紀二千六百一年紀元節奉祝大式典に參列する者一萬五千さしもの廣い練兵場も人の波でギッシリ埋つて、現地邦人の團結振興を示し、擧國體制へのすばらし

とありましたが、問題は果してこの六條に該當すると解して可なりや否やにあるので、折角の親切なこの回答も此の點奥歯に物が挟まつた様な氣が致しますので更に、拓殖大學漢方醫學出身と云ふ肩書きをつけた廣告文案を提示可否をたゞいた處、漸く

一、御照會の廣告の件差支無之候條及回答候也昭和十六年二月二十日 茨城縣警察部衛生課と云ふ回答を得ました。

全參列者は外套も脱ぎ上衣まで脱いで建國體操を行ひ、大地もゆらく健康美を躍動させ、私をして此の興亞の基地に於て、曠國の大精神を感銘深からしめました。事變以來、時代の脚光を浴びて大に逆輸出して來た漢方醫學は興亞の中堅として活躍する居留邦

田舎便り

K先生と云ふ先輩に寄せられた「その頃を思ふ」には眞實に餘の熱くもなるのを禁じ得ませんでした。幾度も繰返して拜讀致しました。成功の裏面には必ず血の出る様な苦闘史があるものだとの感を得、今更年深く考へさせられました。げに傷つく事も倒れる事も茨の道を切り開く者の常であります。而してその間にこそ先驅者たり指導者たる者の最も必要なる力が生ずるのだと思ひます。御承知の通りヒットラーの今日あるは一日にして成つたものではありません。百折不撓理想を追求して邁進する間自らの血を以て闘ひ取つたものであります。

瀧田行彦

中にこそ生ずるものであると思ひます。かゝる意味に於て私は先生方の漢方復興運動に對する素質才能なしと規定したりする事は出来ません、否その尊ひ努力は斷じて徒勞ではありませぬ。絶大の信念を持つて御奮闘下さい。私は下手な尺八を習つて居りますが、竹は吹けば吹く程音の出る来るものもある。五年か十年で昔の止つてふものも分げつかないやうで、結局まあ吹いて見るより仕方がない譯けであります。これは人にも當嵌る事ではないかと思ひます。

北京通信

在中華民國 尾部瀨順久

一、厚生省では御照會の件右は貴縣衛生課に照會相成度回答候也 醫務課係にして可、不可何れの文字も消し

人の健康を護る興業醫術として各方面から歓迎されてゐるのは事實であるが、中國人漢方醫の多數が餘にも無學低級の者が多いので、これ等漢方醫の再教育問題も擡頭してゐるのであるが、(支那人はこれ等漢方醫の治療を甘んじて受けてゐる)今國立北京大學醫學部に漢方研究所の正式設立を見られた事は、吾人漢方醫學に従事するもの大いに意を強くする次第であります。

昨年三月東京で開かれた東亞文化協議第三次醫學部會及び九月北京で開かれた第四次醫學部會の決議によつて、支那側代表の提案の中、日兩國學者協同による本草の整理及び科學的研究を行ふ漢藥研究所の設置が感々實現する事になりました。極く最近に至つて今年度の豫算として中國政府の教育總署より金十一萬圓を計上、國立北

存濟醫盧治驗記 (承前)

蘇州 葉橘泉

(二) 急性肛門周圍炎

前和平建國軍第十四路司令、現暫編第十師々長謝文達君、生來驕悍、體格強壯、平素不知疾病為何事、中華民國二十九年八月間於戎馬倥傯之際、突患肛門腫痛、當延〇〇醫院痔科專家醫學士〇〇診治、經該醫師用器械檢查肛門部之後、其痛感劇烈、澀澀納糞、眞惡止其痛、其副司令李君患傷寒、經予治癒、爲之介紹、遺副官連子診、至則診得惡寒發熱、高達華氏表百〇三度九、大便不行、小溲短赤、據其侍者稱述謂昨日被某醫檢果肛門時腫痛而至暈厥者兩次、其一約五錢、桃仁四錢(研)、生甘草錢半、牡丹皮三錢、冬瓜子四錢(杵)呻吟叫喊、痛恨某醫之無用性情則

穿山甲四錢、皂角刺三錢、金銀花四錢、厚朴錢半、川芎錢半、當歸二錢、川桂枝一錢、第二日副官來請、要求加早出診、於上午八時即驅車往、至則太太笑臉出迎、訴述經過情形、謂昨日下午三時許、眠約一回、約經四小時即再發之狀、深恐忍痛而忍耐至三、至九點十分時忍無可忍、乃接以磁斗(大便斗)、排出堅矢如栗者二粒、即繼之以膿血、及薄薄之糞便約許許、便後以紙楷拭、不復腹痛大減、而會陰部之腫脹遂軟化、居然轉側自如、如釋重負而睡眠因頗安恬、一睡至曉醒來又欲大便、復排出膿血、痛苦、本人已非常快慰、故絕早再請先生從診云云、第二診之處方、方案如下、急性肛門周圍炎、腫痛發熱、便秘煩燥、通腎不得寐、色

漢醫診斷與調劑法

錢問停

人之身、猶天地也。天地失和則宇宙爲殃。人身失和、則四體爲病。蓋心爲君主、君失其治、則宇宙災困。心失其養、則四體疾病。其所以辨其災困、治其疾病者、其維相與醫乎?故曰、「不爲良相、即爲良醫」然、相失政則殘民、醫誤治則殘命、相之與醫、豈易言哉!故吾之業醫者、尤須診斷確實、調劑得當、雖不能生死人而肉白骨、亦必使病體節節減輕、去危就夷、是所當要。奈漢診察尤爲困難、蓋以病家之就診者、皆以診脈爲要務。相傳日久、以爲全身之病皆見於寸口、對於醫家問症等情、輒以醫業不精目之。殊不知病脈相反者頗多。即使病脈相對、亦不過得其一半、並不能窺其全豹。故古有「望聞問切」四法。察其陰陽表裏、寒熱虛實。審其在臟在腑、在氣在

神傷。消痰淡黃、乃久病而體體。山根明亮、須知欲愈之病。環口黑、黑休醫已絕之腎。蓋有諸中必形諸外、見其表以知其裏也。
2、察目 凡目睛明能識見者可治。睛昏不識人、或反目上視、或瞪目直視、或目睛正圓、或戴眼反折、或眼胞陷下、皆不治。閉目欲見人者陽證也。閉目不欲見人者陰證也。目中不了了、睛不和、熱甚於內也。目疼痛者、屬陽明之熱。目赤者、亦熱甚也。目眩者、必將瀕血也。白睛黃者、將發身黃也。凡病欲愈、目皆黃、鼻準明、山根亮。
3、察鼻 鼻頭色青者、腹中痛。鼻色黃者、微黑者水氣。黃色者小便難。白色者爲氣逆。赤色者爲肺熱。鮮明者爲留飲。鼻孔乾燥者、必將瀕血。鼻孔乾燥、黑如烟煤、陽毒熱也。鼻孔冷滑而黑者、陰毒冷極也。鼻息斷者、風溫也。鼻塞濁涕者、風熱也。鼻孔張者爲肺風。肺絕不治。
4、察口唇 凡口唇焦乾爲脾熱。焦而紅者吉、焦而黑者凶。唇口俱赤腫者、熱甚也。唇口俱青黑者、冷極也。口苦者、膽熱也。口中甜者、脾熱也。口燥咽乾者、腎熱也。舌乾口渴、欲飲水者、陽明之熱也。口噤難言者、瘧疾也。若唇青舌卷、唇反青、環口紫黑、口張氣直、口如魚口、口唇顫搖不止、氣出不返、皆不治。
5、察耳 凡耳輪紅潤者生。或黃或白、或黑或青而枯燥者死。薄而白、薄而黑、皆爲腎敗。耳聾、耳中疼、皆可治。若耳聾舌卷唇青皆難治。
6、察舌 凡舌鮮紅者吉、青爲冷。青而紫者、爲陰寒。赤而紫者、爲陽熱。黑者亢極爲難治。凡舌上胎白而滑者、表有寒也。胎黃而燥者、熱盛也。胎黑而燥者、熱甚而亢極也。若不燥渴、舌上黑胎而滑者、爲寒爲陰也。舌卷而焦、黑而燥者、陽毒熱極也。舌青而胎滑者、陰毒冷極也。舌腫脹

心下汨汨有聲、先渴後嘔、停水也。喉中漉漉有聲痰也。腸鳴、雷鳴、氣不和、瀉也。小兒驚風、口不能言、心熱也。無遺膿、為腸聲、死證也。雜病發喘、癆瘵聲啞、危病也。以上若能細察、實能活人。

三、問診 問診者、問其痛苦以知其病也。

1、問寒 熱問其內多之寒熱、欲以辨、其在表在裏也。人傷於寒、則病為熱。故凡病身熱脈緊、頭痛、身痛、拘急無汗、而且得於暫者、心外感也。蓋寒邪在經、所以頭疼身痛。邪閉皮毛、所以拘急發熱。若無表證、而身熱不解、多屬內傷。然必有內證相應。亦有身熱經旬、或至月餘不解、仍屬表證者。蓋因初感寒邪、身熱頭痛、醫誤認爲火厥用寒涼、以致邪不能散。或雖經解散、而寒未及病、以致留蓄在經。其病必外證多而裏證少、此非裏也。仍當解散。凡內證發熱者、多屬陰靈、或因積熱、然必有內證相應、而其來也漸。蓋陰靈者必傷精、傷精者必連陰。故其在上而連肺者、或必爲喘急咳嗽。在中而連脾者、或妨飲食。或生懊惱、或爲煩煩渴渴。在下而連腎者、或精血遺淋、或二便失節。然必寒熱往來、時作時止。或氣快聲微、是皆陰靈證也。內傷積熱者、或在積熱於上下、或臟腑熱於三焦。此當以實火治之。

2、問汗 凡表邪、感者必無汗。有汗者邪隨汗出、已無表邪。此理之自然也。故有邪而汗者、身涼熱退、此邪去也。有邪在經而汗在皮毛者、此非真汗也。有得汗後、邪雖稍減、而未得全盡者、猶有餘邪。不可因汗而謂其無表邪也。凡溫暑等證、有因邪而催汗者、有雖汗而邪未去者、皆表證也。有陽靈而汗者、須實其氣。陰靈而汗者、須益其精。火盛而汗者、涼之自愈。過飲而汗者、清之可寧。此汗證之陰陽表裏、不可不察也。

3、問頭身 問其頭、可察上下。問其身、可察表裏。頭痛者、邪居

陽分。身痛者、邪在諸經。前後左右、陰陽可辨。有熱無熱、內外可分。但屬表邪可散之而愈。凡火盛於內而爲頭痛者、必有內應之證。或在喉口、或在耳目、別無身熱惡寒、在表等候者、此熱感於上、病在裏也。察在何經、宜清宜降、高者抑之、此之謂也。若用輕揚散劑、則火必上升、而痛愈甚矣。有陰靈頭痛者、舉發無時、是因酒色過度、或過勞苦、或逢情慾、其發則甚、此爲裏證、或精或氣、非補不可。凡身痛之甚者、亦當察其表裏以分寒熱。若感寒作痛者、或上或下、原無定所、隨散而愈。此表邪也。若有定處而無表證、乃痛脾之屬。邪氣雖亦在經、當以裏證視之。若因火盛者、或肌膚灼熱、或紅腫不消、或內生煩渴、必有熱證相應。治宜以清以寒。若並無熱候而疼痛不止、多屬陰寒。經曰、痛者、寒多也。有寒故痛也。必溫其經、使血氣流通、其邪自去矣。

4、問二便 二便爲一身之門戶。無論內傷外感、皆當察此以辨其寒熱靈實。蓋前陰通膀胱之道、而其利與不利、熱與不熱、可察氣化之強弱。凡患傷寒而小水利者、以太陽之氣未劇吉兆也。後陰開大腸之門、而其通與不通、結與不結、可察陽明之靈實。凡大便燥結、而腹中堅滿者方屬有餘、通之可也。蓋二便皆爲元氣之關非真見實邪、方可謂通識下。萬不可誤攻。使非真實而妄逐之、導去元氣、則邪之在表者、反乘靈而深陷。因困者、必由瀉而愈虧。所以凡病不足、慎勿瀉通。最善者小便得氣而自達。大便難、當衛既訖、自將通達。即大腸秘結句何慮之有。若滑泄不止、乃非靈弱者所寔、當首先爲之防也。

5、問飲食 飲食者一可察胃口之清濁、二可察臟腑之陰陽。病由外感而食不進者、知其邪未及臟、而惡食不惡食可知。病由內傾而食飲變常者、辨內味有喜惡、而愛冷愛熱者可知矣。素欲溫熱者、知陰

臟之宜燠。素好寒冷者、知陰臟之可清。或口腹之失節、以致誤傷。凡諸病得食稍安者、必是靈證。此當辨而治之者也。

6、問胸 胸腹之病極多、凡胸腹脹滿、不可用補。不脹不滿未可用攻。然痞與滿不同、當分輕重。重者雖藥中病、此實邪也。不得攻者雖不欲食、不知飽飽、似不脹非脹、中空無物、乃痞氣耳、非真滿也。此或邪陷胸中、或脾運不運、不可不察。

7、問渴 凡內熱之證、則大渴喜冷水不絕、腹堅便結、脈實氣壯。此陽證也。口雖渴也喜熱不喜冷者。此非火證、中寒可知。此水虧之故耳。亦有口渴而不欲飲者、此真陰內虧、口無津液也。亦有口渴飲而即吐者、此內有停飲所致也。

1、浮脈 浮在皮毛、如水漂木。舉之有餘、按之不足。蓋浮爲陽、其病在表。寸浮傷風、頭痛鼻塞。左關浮、則風在中焦。右關浮、則風痰在膈。尺部得浮、下焦風客。小便不利、大便秘澀。

2、沈脈 沈行筋骨、如水投石。按之有餘、舉之不足。蓋沈爲陰、其病在裏。寸沈短氣、胸膈引脅、或爲痰飲、或水與血。主關中寒、因而痛結、或爲滿悶、吞酸筋急。尺主背痛、亦主腰膝、陰下濕蒸、淋瀝泄。

6、瀉脈 瀉脈塞滯、如刀刮竹。遲細而短、三象俱足。病主血少、亦主精傷。寸汗心痛、或爲怔忡。關汗陰虛、因而中熱。右關上澀、關汗陰虛。尺汗遺淋、血痢可決。左關滑脈、無孕血竭。

8、實脈 實脈有力、長大而堅。應指幅幅、三候皆然。病主血實氣滯、火熱壅結。左寸心勞、舌強氣湧。右寸肺病、嘔逆咽痛。左關見實、肝火脅痛。右關見實、中滿氣痛。左尺之、便閉腹痛。右尺見之、相火亢逆。

9、長脈 長脈迢迢、首尾俱端。直上直下、如循長竿。病主有餘、氣逆火盛。左寸見長、君火爲病。右寸見長滿瀉、左寸見長、木實之殃。右關見長、土鬱脹悶。左尺見之、奔豚沖竅。右尺見之、知火專令。

10、洪脈 短脈瀉小、首尾俱俯。中間突起、不能滿部。病主不及、爲氣靈證。短居左寸、心神不定。短見右寸、肺癆頭痛。短在左關、肝氣有傷。短在右關、膈間爲殃。左尺短時、少腹必痛。右尺短時、眞火不降。

11、洪脈 洪脈極大、狀如洪水。來盛去衰、瀉瀉瀉指。病主盛滿、氣壅火亢。左寸洪大、心煩苦嘔。右寸洪大、胸膈氣逆。左關見洪、肝脈太過。右關見洪、脾土脹熱。左尺洪、則了枯便難。右尺洪則龍火燥灼。

12、微脈 微脈極細、而又極軟。似有若無、欲絕非絕。病主氣血大衰。左寸微怯、右寸微促。左關微枯、右尺得微、陽衰命絕。

13、細脈 細直而軟、彙彙榮榮。狀如絲線、較顯於微。病主氣衰、諸靈勞損。細居左寸、怔忡不寐。細居右寸、嘔吐氣怯。細入左關、肝陰枯竭。細入右關、胃靈脹滿。左尺若細、泄利遺精。右尺若細、下元冷感。

14、濡脈 濡脈細軟、見於存分。舉之乃見、按之即空。其病主陰、隨竭精傷。左寸見濡、健忘驚悸。右寸見濡、膜靈自汗。左關逢之、血不榮筋。右關逢之、脾靈濕侵。左尺得濡、精血枯損。右尺得之、火敗命絕。

15、弱脈 弱脈細小、見於沈分。舉之則無、按之乃得。病主陽陷、眞氣衰竭。左寸寸靈、驚悸健忘。右寸肺虛、自汗短氣。左關木枯、必苦癱急。右關土寒、水穀之病。左尺弱形、涸流可徵。右尺若見、陽陷可驗。

16、緊脈 緊脈有力、左右彈人。如絞轉索、緊如切繩。病主寒邪、又主諸痛。左寸逢緊、心滿急痛。右寸逢緊、傷寒喘嗽。左關木迎、浮緊傷寒。右關氣口、沈緊傷食。左尺見之、臍下痛極。右尺見之、奔豚痲疾。

17、緩脈 緩脈四至、來往和勻。微風輕颺、杓杓初春。蓋緩爲胃脈。不主於病、取其兼見、方能斷證。浮緩風傷、沈緩寒濕。

18、弦脈 弦如琴弦、輕靈而滑。端直以長、指下挺然。病主肝風、主痛主癢、主痰主飲、弦在左手、心中必痛。弦在右手、胸及頭痛。左關弦、則瘦瘵癢癢。右關後、則胃寒腹痛。左尺逢弦、飲在下焦。右尺逢弦、足癢疝痛。

19、動脈 動無頭尾、其形如豆。厥々動搖、必兼滑數。其病主痛、亦主於驚。左寸得動、驚悸可斷。右寸得動、自汗無疑。左關若動、驚悸拘攣。右關若動、心脾疼痛。左尺見之、亡精爲病。右尺見之、龍火迅奮。

20、促脈 促爲急促、數時一止。如趨而蹶、進則必死。病主火亢、亦因物停。左寸見促、心火炎炎。

21、結脈 結爲凝結、緩時一止。徐行而怠、頗得其旨。病主陰寒、亦由凝滯。左寸心寒、疼痛可見。右寸肺靈、一氣寒凝滯。左關結見、疝瘕必現。右關結形痰滯食停。左尺結、則爲痿痺。右尺結、則爲陰寒。

22、代脈 代爲離代、止有常數。不能自還、良久復動。病主臟衰、危惡之候。脾臟敗壞、吐利爲咎。中寒不食、腹痛難收。

23、革脈 革大弦急、浮取即得。按之乃空、漚如鼓革。病主表寒、亦屬中虛。左寸之革、心血靈痛。右寸之革、金衰氣壅。左關遇之、疝瘕爲祟。右關遇之、土靈而疼。左尺診革、精空可必。右尺診革、殞命爲憂。女人得之、半產漏下。

24、牢脈 牢脈沈沈、大而弦實。浮中二候、了不可得。病主堅積而主內。左寸之牢、伏梁爲病。右寸之牢、息貫可定。左關見牢、脈家血積。右關見牢、陰寒痲痺。左尺牢形、奔豚爲病。右尺牢形、疝瘕痛甚。

25、散脈 散脈浮亂、有表無裏。中候漸空、按則絕矣。病主本傷。見則危殆。左寸之散、怔忡不臥。右寸之散、自汗淋漓。左關之散、脹滿蠱壞。右關之散、當有溢飲。居於左尺、北方水竭。右尺得之、陽消命絕。

26、芤脈 芤乃草名、絕類慈蔥。浮沈俱有、中候漸空。其脈中空、病主失血。左寸芤亡、心主寒血。右寸芤亡、相傳陰亡。左關芤、肝血不藏。右關芤、脾血不攝。左尺如芤、便紅爲咎。右尺如芤、火炎精漏。

九、祛寒劑
附子—辛溫有毒、溫經散寒。
肉桂—辛溫、溫中降氣、腹痛奔豚。
吳茱萸—辛溫、溫中下氣、止痛除血痢。

十、解熱劑
玄參—苦微寒、補腎水、退熱明目、解煩渴、利咽喉。
黃連—苦寒、去中焦火熱、心煩胃熱諸語。
歸脾草—苦寒、解肝膽熱邪、除下焦濕氣。

十一、潤燥劑
天門冬—甘寒、治咳嗽、潤燥。
麥門冬—甘微寒、潤肺生津止渴。
麻仁—甘平潤五臟、通大腸催生蜂蜜—甘平、和百藥、解諸毒、安五臟、潤大腸。

十二、利尿劑
木通—辛甘平、治五淋、通九竅行經下乳、催生胎胎。
車前子—甘寒、利水止瀉、導小腸熱。

十三、除痰劑
貝母—辛苦微寒、消痰潤肺、除熱清心、咳嗽上氣。
半夏—辛溫、和胃健脾、除濕化痰。
杏仁—甘溫苦、化痰止咳、散結潤燥。

十四、收斂劑
五味子—酸溫、主咳、逆上氣、斂肺完喘、斂汗固腸。
酸棗仁—酸平、治驚悸盜汗、徹夜不眠。
龍骨—甘平瀉精、固腸、縮小便止自汗。

十五、驅蟲劑
使君子—甘溫、殺蟲治小兒五疳。
川楝子—苦寒、殺三蟲、利小便療疝氣。
薤白—辛平、除疝積、殺諸蟲。

十六、明目劑
菊花—甘平微寒、能養目去翳膜、治頭目眩暈。
石決明—鹹平、除青盲內障。
蜜蒙花—甘平養榮和血、退翳明目。

十七、治瀉劑
大麥芽—甘鹹溫、運行三焦、腹鳴腹軟。
神麩—甘辛溫、化水穀、消積滯。
穀芽—甘苦消食溫中。

十八、消毒劑
山查—酸平、消肉積、行乳滯。
金銀花—甘平、能解熱、消癰止痢。
白蘞皮—苦寒、化濕熱瘡毒、筋癆疔肌。

十九、解毒劑
雄黃—苦平、治楊梅疔毒、疥癬痔瘡。
露蜂房—甘溫有毒、治驚癇附骨癰疽。
蒲公英—甘平、化熱毒、解食毒。

二十、解毒劑
以上共十八劑、每劑列藥數種、以備參考。若求其詳、又當熟讀本草、或余之醫方本草、則可矣、此篇不能畢述、望我同志其諒之！
任之草於蒙頭包頭市

偕行學苑創立記念大講演會 拓大漢方圖書館開館式

去る二月十一日は東亞醫學協會の前身、偕行學苑の創立六周年の記念日に當り、拓大漢方講座の第五回開講も迫つたので新特別講座講師の参加を乞ひ、大講演會を開催して、更に昨年九月以來整備を急いで来た協會附屬漢方圖書館の開館式をも兼ね、謹みて附神神祭及先哲醫家慰靈祭を執行した。

先づ開會に先ち、皇居遙拜、英靈に感謝の祈念、皇軍の武運長久を祈り、矢敷道明氏司會者となり頭山滿翁揮毫の附神神に禮拜し、謹みて、明治天皇御製
千早ふる神のひらきし道をまた
開くは人の力なりけり
を奉誦し奉る。

次で先哲醫家慰靈祭に移り、溫知社最後の社首として身を以て漢

この秋は雨かひでりか知らねども
今日のつとめと田草取るなり
の歌の心を體して職域奉公に邁進せん」と結ぶ。新に設けられた特別講演會漢方漢武氏の「紫參に就て」なる眞摯にして權威ある學術發表あり織いて矢敷有道氏「時局下に於ける漢方醫の對策」と題し、漢藥不足問題及び醫療制度改革問題に對して漢方醫家の執るべき方策につき具體例を以て説き、柳谷素靈氏は「國民體位向上問題と鍼灸醫學」なる表題の下に、物資不足の現下、特に體位向上方策としての灸術の應用は最も國策線に沿ふものなることを明確に力説された。

次に木村長久氏は「醫は仁術の説」と題して孟子の説く眞髓を體驗を通じて諄々として説き去り説き來つて體を正さしめ、栗原廣三氏は「國策と民間醫」なる表題の下に民間醫の現代使命を論じ、その獨自の東洋哲學から漢方精神を高揚し感銘を與へ、清水藤太郎氏は「時局と漢方藥」と題して統制經濟の漢方藥に及ぼす現況を詳細なる實際的數字を以て説明され、統制經濟の眞相を傳へて非常な好資料を提供した。

次に來賓として特に臨席された淺井新太郎先生の涙ぐまじき感想演説あり、一座肅然として感涙にむせぶ。次に安西安周先生の山田棟庭先生の逸話につき懇篤なる御話しあつて後、大塚敬節氏立つて吾人の立場は大已貴命の醫道精神に復歸して外來醫學を攝取して日本独自の醫學を大成すべき大理想を説き閉會となる。會員は感激に酔ふもの如く暫し坐を立つもなく極めて盛會裡に終了した。

終つて來賓理事一同圖書館にて會館式を舉行降参を共にして散會した。

昭和十六年二月十一日舉行の拓殖大學漢方講座 記念講演會出席者芳名左の如し

來賓者側 (順不同)
淺井新太郎氏 (故淺井國幹先生後嗣) 安西安周氏
講師及び會員 (敬稱略)
大塚敬節、栗原廣三、渡邊武、矢敷道明、矢敷有道、柳谷素靈、木村長久、清水藤太郎 (龍野一雄氏缺席)、諸講師、及び下記會員
岩田基宜、板倉てる、坂名城孫位、白田貴、西澤生惠、岡部素道、新田順久、河野伯道、渡邊靜、藤教雄、野田伯道、金城秀屹、完山主嶺、吉田一郎、吉田增敏、高橋庄三、田先滿壽男、高柳米壽、根岸傳、海野慎惠、野田一之、野口乱、倉谷忠雄、龍野可一、山本平一郎、山之口能夫秀、前川勢津子、福本榮次郎、藤井治郎作、深堀賢治、小林三三郎、海老名龍雄、相川壽々、安達拾次郎、佐藤文藏、塚家壽芳、木村ハナ子、姜德順、氣賀林一、三村智生、平野光風。

熊野氏電療器寄附

去る二月十一日創立記念日に當り、會員熊野可一氏は野一色蒸氣電氣治療機一臺を本協會宛寄贈された。熊野氏は昨年夏期講座終了後引き続き拓大講座を聴講され、終る例會に於ては「電療と漢方醫學」なる演題にて講演をなし、多大の感銘を與へた。眞摯篤學の士である。今秋漢方漢武一色電療及び漢方張り切つてゐられる。

代田文誌氏圖書館へ寄贈

第五回拓大特別講座講師を快諾された代田文誌氏は此程その名著たる、
一、鍼灸治療基礎學 一部
二、閃光記 一部
三、鍼灸讀本 一部
漢方圖書館へ寄附された。謹んで拜受厚く禮申上ぐる次第である。

滿洲國漢醫試驗實施

豫て準備中の滿洲國漢醫の試驗制度につき最後の打合せをなすことになり、此程同國民生部より囑託たる矢敷、龍野兩氏宛招狀が來たが、來る三月中旬、龍野一雄理事が渡滿することとなつた。

滿洲國漢方藥局方制定

滿洲國國民生部保健司よりの招約により、同國漢方藥局方制定の爲め、本協會理事清水藤太郎氏、栗原廣三氏及び木村雄四郎博士の三氏が近々渡滿することとなつた。

日本漢方醫學會大講演會

今般醫道の日本及び本誌と合同して、その名を残した漢方と漢誌は此の度新陣容を整へ、來る三月二十九日午後一時より、東京醫師會館にて記念大講演會を開催することとなつた。當日の講演者並に演題は別記の如くである。

東優定時總會と講演會

東京優良品販賣會にては三月十

(七)

一日午後一時半より軍人會館にて定時總會を開催、學術講演をなすこととなり、大塚敬節氏の百日咳の漢方治療法、矢數道明氏の腎臟病の漢方治療法につきそれぞれ特別講演をなすこととなつた。

本誌代納入者

芳名

(一月一日より一月三十一日迄受付分)

- 金五圓也 渡邊 瑛美氏
金三圓六十錢也 吉田 増藏氏
金三圓也 加藤 直成氏
金二圓四十錢也 前川源太郎氏
金二圓三十錢也 山本 診造氏
金二圓也 熊野 可一氏
金一圓二十錢也 大田 次郎氏
金一圓二十錢也 大田 什安氏
金一圓二十錢也 九田 良一氏
金一圓二十錢也 坂上 黃堂氏
金一圓二十錢也 鈴木 泰助氏
金一圓二十錢也 川邊 信行氏
金一圓二十錢也 田村 卓丈氏
金一圓二十錢也 廣澤 正敏氏
金一圓二十錢也 佐藤 喜一氏
金一圓二十錢也 倉田 省三氏
金一圓二十錢也 三村 智生氏
金一圓二十錢也 高橋 正保氏
金一圓二十錢也 渡邊 一二氏
金一圓二十錢也 金子 善勝氏
金一圓二十錢也 本田 精一氏
金一圓二十錢也 坂名城孫位氏
金一圓二十錢也 原 啓子氏
金一圓二十錢也 高橋 庄三氏
金一圓二十錢也 橋詰 盛義氏
金一圓二十錢也 黒田朝太郎氏

本協會寄附者

芳名

(二月一日より三月五日迄)
金二十圓也 龜田 貞氏
金十圓也 秋山 禾門氏
金五圓也 志村切七郎氏
金一圓四十錢也 安達捨次郎氏
金一圓四十錢也 吉田 増藏氏

本誌代納入者

芳名

金二圓四十錢也 中原富一郎氏
金二圓四十錢也 若林已三郎氏
金二圓也 吉村 得二氏
金二圓也 海老名龍雄氏
金二圓也 石川新之助氏
金二圓二十錢也 黒田朝太郎氏
金二圓二十錢也 徳永千代松氏
金二圓二十錢也 福山 省吾氏
金二圓二十錢也 武内讓一郎氏
金二圓二十錢也 中村 通氏
金二圓二十錢也 吳 文 通氏
金二圓二十錢也 村田 康孝氏
金二圓二十錢也 中村 重孝氏
金二圓二十錢也 全 齊 桓氏
金二圓二十錢也 藤田 昌宏氏
金二圓二十錢也 鹽谷 温氏
金二圓二十錢也 山本惣太郎氏
金二圓二十錢也 中島 道孔氏
金二圓二十錢也 山元 晋策氏
金二圓二十錢也 丸田 可平氏

温知社遺品協會にて保管

温知社解散してこゝに五十五年淺井國幹先生所藏の温知社遺品たる、淺田宗伯翁の温知醫藥記及び温知社十五年全國大會席上揮毫、同じく森根園翁の一軸の三品は豫

發展的解消へ!

てより本協會にて保管の任に當つてきたが、此度正式に後嗣淺井新太郎先生の御意志を體して協會に

て寄贈を受け、拓殖大學に保管、毎年祭祀を行ふこととなつた。

矢數有道

過去滿二ヶ年間に東亞醫學協會が殘した足跡はまさに刮目に價するものがある。そしてこの事業の重要な役割を果したのは、實に機關誌「東亞醫學」であることについて、異論を挿む餘地はない。本誌のもつ内容はまた特殊なものであつて、誌面から受ける印象は、堪らなく私は好きである。この愛すべきわれらの「東亞醫學」が雜誌統合命令のため本誌を最終として姿を消すことになつたことは、

編輯後記

益々増大してくる。われらは「漢方と漢藥」誌の中へ「東亞醫學」の精神を吹き込んで使命遂行の責務を果したいと念願する。

謹告

本誌終刊に際し、誌代の整理は勝手ながら漢方と漢藥誌代に振替へさせて頂き度く何卒此の儀御諒承下さい。殘金漢方と漢藥誌一部五十錢に足らぬ方は會報なり、叢書なり御送りしますから適當の方法をお一任下さい。

東亞醫學協會

漢方醫學復興の理論

竹山晋一郎著

本書は東京市牛込區新小川町二ノ七 温知堂醫院内「漢方醫學復興の理論」出版後援會宛申込み度し 定價は三圓二十錢の處本誌會員に限り送料共金三圓也 振替は東京二二二二番

東洋醫學史

(巴陵宣祐氏の西洋醫學史と合冊)

大塚敬節著

山雅房版 (科學史叢書ノ中)

定價 三圓五十錢

發行所

山雅房

振替東京二二〇〇二五番

東京市牛込區市谷町三ノ二〇